

万葉集における漢土思想

—— 儒教・老莊・神仙思想 ——

石 川 喜 美 子

目 次

序

第一章 儒教思想

まえがき

一、婦 徳

二、教諭的意識

三、親子の情

四、帝王讃美

五、敬 老

六、仁 教

第二章 老莊思想

まえがき

一、讃酒歌

(イ) 出 典

(ロ) 思 想

二、三三五一の歌

第三章 神仙思想

(略)

まえがき

一、神仙思想の受容態度

二、遊仙窟及び遊於松浦河の神仙性 (略)

結 論

注 (略)

参考文献 (略)

序

万葉集には、儒教を始め老莊・神仙の思想の影響が少なからず見られる。万葉集とこれ等漢土思想との関係については、これまでかなり多くの研究がなされており、その説もさまざまである。その中で内田泉之助氏は

題材の借用に止まり思想そのものについては、顕著な影響は見受けられない。(中略)中国思想が歌人の思想を牽制し支配した点は少なかつたと思われる。(文選と万葉集)

と述べておられるが、私はどうもこれには賛成できないように思う。なぜなら、上代文学において、漢土思想の影響は、ことに強いものがあり、万葉集の歌にしても特に思想歌として取り上げようと

する人も^生いる程である。本稿私は、この内田氏の説に対する疑問から発し、仏教思想を除いた儒教・老莊・神仙思想について、そ受の容態度、作歌意識、それに各思想間の関係等を中心として、当時の人々がこれ等漢土思想をいかに受けとめていたか、その一端でも明らかにする事ができればと思った次第である。

第一章 儒教思想

まえがき

岡田正之氏が

推古以来、我が国民思想を支配したるものは、儒仏の二教なり。

就中、儒教は実生活に一大關係を有せしを以て、其の普及最も広く、万葉集に其の思想の流露するは、当然の結果なり。（近江奈良朝の漢文学）

と述べておられるように、万葉集においても、儒教思想はかなり見られ、それはむしろ当時の中核をなす思想の一つであったと見てもよいようである。

さて、その万葉集において儒教を詠み込んだ作家としては、何といつても先ず憶良が上げられる。岡田氏は、更に続けて、

山上憶良は、万葉作者中最も漢文学に深く和歌に卓絶したるを以て、類に触れて儒教思想を詠み、我が国民の徳性を輔相顕揚せんと企てたり。（同上）

と述べておられる。氏の言われる通り、憶良の儒教思想は、官人のもんとして表面に現われる事が多く、教論的な方法をもって、引用され説かれる場合が多い。

この章では、儒教思想を最もよく歌い込んだ右憶良を中心に、その受容態度を見ていきたい。

一、婦 徳

「大宰帥大伴卿報凶問歌」は、憶良が旅人の妻（一説には憶良の妻）の死を悼んで書かれたものである。この作品を流れる全体の雰囲気としては、仏教的無常観が主体をなしている。が、その中に儒教的用語「三従」「四徳」が見られる。それは、

紅顔共三従長逝、素質与四徳永滅。

という風に用いられている。「三従」は、礼記郊特牲篇、儀礼喪服伝、孔子家語本命篇（略）に見られる如く、婦人の徳目とされるものである。又、「四徳」は、周礼天官九嬪、鄭注、礼記昏義篇、曹大家の女誡に見られる如く、「婦徳」「婦言」「婦容」「婦功」を言う。いずれも儒家の書に見られ仏典にはない儒教的色彩の濃い語である。

ただ此の作では、「三従」「四徳」を、特に思想的に歌っているのではない。むしろ年を取り、容色の衰えた事を嘆いたもので、明らかに無常観的な思想である。がその婦人の衰えを表わすのにわざわざ儒教的な語句を用いた所に、大いに注目する必要がある。

思うに、憶良はなぜこのような儒教思想を表わす語を、あえて仏教的無常観の歌の中に、詠み込んだのであろうか。これは憶良の知識教養の中に外ならぬ強い儒教的要素があり、その一端が図らずもここに現われたものであろう。

言うまでもなく儒教思想には、広く義をもって、社会秩序を保ち、君命に身を捧げるといふ一面がある。これは典型的な官人の思

想でもある。官吏は当時最も多く外来思想を受け取る立場にあった。当時六朝の思想が抬頭してきたとはいえ、やはり儒教思想は奈良朝の中核をなす思想であつたと思う。当時の政治の規範たる律令及び詔勅に至る迄、根本思想が儒教思想であつた事からも容易に察せられる。即ち、その国司の一人であつた憶良を支えているものが、儒教思想であつた事は疑う余地はないであらう。

二、教論的意識

憶良の歌には、官吏としての意識、教論的態度が特に顕著である。それは「令反感情歌」を見ても良く解る。この歌に関して内田氏は、

岡田博士は、これを儒教思想を詠じた代表作としてゐるが、作者自体どれ丈の儒教的信念があつたかは受け取り難い。觀念として或は言語の遊技としての叙述に終っている。(文選と万葉集)と述べておられる。が果してそうであらうか。

先ず作中にある「三綱」「五教」の語について見るに、「三綱」は、

三綱者何謂也、謂君主、父子、夫婦也。：故君為臣之綱、父為子之綱、夫為妻之綱。(白虎通、礼記呂東萊文係)

とある如く、君臣・父子・夫妻間の道德を説いたものである。「五

教」は、

慎微^{△△}五典、五典克從(尚書舜典)

とあり、伝に、

五典五常之教。父義、母慈、兄友、弟恭、子孝。

と説明している。又孟子勝文公上にも見える。何れも儒家の書に見

え、儒教思想を表わす語である。

次に、この歌の内容を考えてみるに、この歌は、「倍俗先生」と称する人に、三綱の道を示し、五常の教を明らかにし、歌を贈つて、其の惑う心を反さしめようとしたものである。

大陸の仙人思想の弊を受ける事が甚だしく、指導的立場に立つ者としては、これを看過するを得ないでこの歌となつたものである。この国土に不道德者の存在を許さないとする道德的氣魄は十分に描出されている。(万葉集全註釈卷五)

と指摘されている通り実際に、道家、老莊かぶれの山沢亡命の民が、このように自ら倍俗先生と名のり、自由氣儘にふるまっていた事に対する憶良の教論的態度の現われである。内田氏の言われる「觀念」或は「言語の遊技」としての叙述には終っていない。いかにも儒教思想を受容した官吏としての憶良らしい作であると思う。憶良にとって儒教思想とは、單なる觀念ではなく、生活の一部、更には生活の支えであつたと言つても過言ではあるまい。岡田氏も、「令反感情歌」は、明白に道德的実生活の儒教主義を闡明したるものなり。(近江奈良朝の漢文学)と述べておられる。

同じく儒教思想を歌い込んだものに、「悲歎俗道仮合即難易去難留詩」の

周孔之垂訓、前張三綱五教、收濟邦國。

がある。この歌もやはり「報凶問歌」と同じく、仏教的無常觀の中に儒教思想を教諭する形で説いている。

このように憶良の歌には、常に儒教的教論の意図が見られるのである。又、「憶良誠惶頓首謹啓」の中に、

憶良聞、方岳諸侯都督刺史、並依典法、巡行部下、察其風俗。

というくだりが見られるように、彼は官人の意識に満ちた人であった。人の上に立ち、指導していく立場の彼としては、律令の根本思想たる儒教を、部落民に教諭する必要がある、それが仕事の一部だったのかもしれない。

五、敬老

卷十六「竹取翁偶逢九箇神女贈近狎之罪作歌一首并序」の歌に、
(前略) 古の賢しき人も、後の世のかたみにせむと老人を送りし
車持ち還り来し

という敬老を説いたくだりがある。ところがこの「敬老」の思想については、従来まだ儒教思想として特に取り上げたものを見ないが、これはなお検討を要する。

有名な孟子が齊の宣王に向って王道を説いた所に、

王欲行之、則盍反其本矣。五畝之宅、樹之以桑。五十者可以衣帛矣。雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者可以食肉矣。白畝之田、勿奪其時、八口之家、可以無飢矣。謹庠序之教、申之以孝悌之義。頒白者不負戴於道路矣。老者衣帛食肉。黎民不飢寒、然而王者未之有也。

(梁惠王上)

とある。これは王道の基が国民の生活安定にある事を強調したものである。そしてその具体策の一つとして、「頒白者不戴於道路矣」「老者衣帛食肉」「五十者以衣帛」「七十者可以食肉矣」等が上げられている。特に老人に対して荷物を負載させず、帛を着肉を食べさせるというのは、取りも直さず敬老乃至孝行の精神に外ならない。

さてこの歌は、孝子伝に見える原穀の故事を引用し、老人を敬すべき事を、娘子等に向って教えている。又その後続く娘子等九人が各々詠んだ歌にも、老人の言に黙って従おうとする「敬老」の思想が見られる。これは正しく儒教思想の一つの特徴をなす教諭意識に当るものである。その点について武田氏は、

この諷諫体は、憶良の「令反感情歌」を連想させる。「万葉集全註釈」

と述べておられる。これは両作品の「諷諫体」即ち、私のいう教諭意識について述べておられるのであろう。教諭意識については既に度々述べたが、「令反感情歌」においては、倍俗先生に対して作者が「三綱五教」を説く。同様に「竹取の翁の歌」においては、老人を軽蔑する娘子等に対して、老人が敬老の思想を説くのである。これは全く同じ手法である。

又この「竹取の翁の歌」について一般には、神仙思想の代表作品といわれている。それは、老爺が仙薬を煮る仙女に逢うという構想からでも容易に推察できる。しかし、

辱を忍び辱を黙して事も無くの言はぬ先にわれは寄りなむ(三七九五)

の歌を取ってみても、翁の言に黙って従おうとする「敬老」の思想を歌っている事、更に契沖の言う如く、班昭の「七誠七篇」の第一、謙讓恭敬、先入後己、有善莫名、有惡莫辞、忍辱含垢、常苦畏懼、是謂卑弱下人也。

を引用している事からも、儒教思想がある事は十分認められる。神仙性を大きな背景とした中に、儒教思想を教諭するという形態を執って歌い込んでいるのである。

第二章 老莊思想

まえがき

唐律における道家思想を排除して建てられた我が律令の下においては、老莊思想は必ずしも尊重されたものではなかった。即ち、

癸亥。勅内外文武百官及天下百姓。有学習異端蓄積幻術。壓魅咒咀害傷百物者。首斬從流。(続日本紀四月癸亥の条)

の例が見られるように、その当時老莊思想は政策に合わないとして異端視されていたにもかかわらず、よしそれが儒教のように表面的に現われる事はなかったにしても、かなり当時の人の心に浸透していたようである。越智広江が「懷風藻」の中に、

文藻我所難。莊老我所好。行年已過半。今更為何勞。(五八)

という一首を残している事より、官衣を脱いだ人生において、老莊の境地を楽しんだと中西氏が述べておられるのもその一端を示すものであろう。儒教思想が官人の晴れの姿の中に現われるとするならば、老莊は正にその盛装を脱いだ日常の生活に現われるものと言える。即ち老莊が前述の如く、政治の裏面において行なわれたものであるだけに、それは一面から見ればむしろ本当の意味での人間性の現われであり、あるがまゝの人間の姿であるとも言えよう。

さて、第一章で述べた儒教を最も多く受け入れたと見られる憶良にも、老莊・神仙思想を受容している一面がある。例えばそれについて森本治吉氏は、「令反感情歌」の倍俗先生における「天」その他の老莊の語句を指摘し、吉永登氏は、「竹取翁の歌」の作者を憶良ではないかとしておられる。ただ前者においては、老莊思想はむしろ否定された形で用いられているし、儒教思想に比べればその比

重はかなり小さい。又後者においても憶良説は、あくまでも仮説である。つまり森本・吉永両氏とも、その中に老莊思想をことさらに認めておられる訳ではなく、憶良における老莊思想は極めて少ない。

従ってここでは、旅人の老莊思想を詠じた代表作品の一つ「讃酒歌」を中心に、卷十六の三八五一の歌について内田氏の見解を考えあわせながら、当時の老莊思想の一端を考えてみたいと思う。

一、讃酒歌

(4) 出典

旅人の「讃酒歌十三首」(3・三三八―三五〇)については従来多くの研究がなされており、その出典についても次記のように、実に多くのものが上げられている。内田氏は、

個々の篇に典故を求むれば、なお幾つかを上げようが、これを全体として通読する時は、七賢の一たる劉伶の「酒徳頌」(文選四部叢刊本による。)等に、創作の興味を得たのではあるまいか。(文選と万葉集)

と述べておられる。おおよそ「讃酒歌」の出典と思われるものをあげると次の通りである。

(表及び各説略)

以上個々の典故をあげてみた。武田氏は、全体的にこの「讃酒歌」を見て、

この十三首、連作を以て見るべきであるが、全体としての組織はない。唯第一首は、総括的な意味があり……。(後略)(万葉集註釈)

と述べておられる。確かにこの第一首、

験なき物を念はずは、一杯の濁れる酒を、飲むべくあるらし

(3・三三八)

は、内容から見ても総括的な意味があるように思われる。してみると、もし内田氏のいわれる如く、全体的にどれに興味を持ったかを論ずる必要があるとすれば、むしろ文選古詩十九首に興味をもったとされてしかるべきである。

とにかく旅人は、漢土の故事を引用する事等により、酒というものを語りたかったのだと思われる。それ故さまざまな出典があつて当然だし、かえつてその方が知識者としての面目も大いに立つという事にもなる。いろいろな出典が上げられる中で、どれが旅人に一番興味を与えたかという答を出す事は、この場合余り意味がないであらうし、一つに限定する必要も更にないと思うのである。

(四) 思想

中西氏は、「讃酒歌」について、

竹林の七賢の欲したのも酒であつたと歌うのは、決して知識の回想ではない。その世外の姿にひとと目を当てたからだ。(万葉史の研究)

と述べておられる。氏のいわれる通り、私も又、確かにこの中には、何らかの思想的な意図があつた事が伺えるように思う。

和辻哲郎氏は、

この世にし楽しくあらば、来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ

(3・三四八)

の歌を仏教的輪廻の思想としておられるが、

生ける者遂にも死ぬるものにあれば、この世なる間は楽しくをあ

らな(3・三四九)

をも合わせて、青木正児氏は、

仏教の来世思想の混入はあるが、根本思想は、揚末の快樂説から来ているので、魏晋清談の徒の間に漲っていた思想の影響であらう。(支那文学芸術考)

と述べておられる。二首の意味からしても、作者のいわんとするのは、来世の事でなく、来世の事を考えずにこの世で楽しく過ごそう、この世で楽しければ、来世はどうでもかまわないという主旨のものである。中西氏もこの立場を取っておられるし、仏教の輪廻思想とするよりは、現世の享樂的態度と見る方が妥当だと思われる。更に武田氏は、

彼の精神上の不幸は、仏教をもつて救う事ができなかったのであらう。(万葉集全註釈)

と述べておられる。いずれも旅人の根本思想にかなり強く老莊思想のある事を認められたものである。一方、旅人の「讃酒歌」における立場を、「あそび」(高木市之助氏)としたり、「自ら調子にのつたような趣」(五味保義氏)「中国の隠士きどりの発想で趣味性」(中西氏)等といろいろに評しておられる。

しかし、旅人の作歌事情を考えてみる時、どうしてもそこに表われた老莊的思想性というものを否定する事はできない。更に、

賢しきと物いふよりは、酒飲みて酔哭するしまさりたるらし

(三四一)

言はむすべしむすべ知らに、貴きものは酒にしあるらし(三四三)
世の中の遊びの道にすずしきは酔哭するにあるべくあるらし(三四七)

黙然居りて賢しらするは、酒飲みて酔泣するになほ及かずけり
(三五〇)

等の歌にも、前述のいかんともし難い旅人の心情が、実によく表われていると思える。淋しさにどうしようもなく酒を飲み、酔哭きする旅人。歌の至る所にその心情というものが手に取るように伺え、読む者の心に伝わってくる。自分の淋しさを「言はむすべしむすべ知らに」と歌い、「酒飲みて酔哭きする」のが一番だと切々に歌いあげるのである。その心境は、老荘的虚無思想に共鳴しているという事ができる。「なす術を知らず」に、ただ「酒におぼれ」「酔哭きする」事によって淋しさを紛らわせようとしているにもかかわらず、旅人は少しも酔う事は出来ずに、一層虚無感というものを味わったのではあるまいか。

第三章 神仙思想

まえがき

中西氏はその著書「万葉史の研究」の中で、「遠遊」「高唐賦」「神女賦」「洛神賦」等をあげ、神仙思想の流れを説明しておられる。これ等神仙思想の代表的作品は、万葉集にもかなりの影響を与えている。神仙思想の中心の一つは、不老不死、羽化登仙の仙業を求める事にあるといわれる。その不老不死としての神仙思想が、万葉集ではいかに現われているのであろうか。

「遊於松浦河」の構想が遊仙趣味の最もすぐれた翻訳である事は、中西氏も述べてられているし、古沢未知男氏はその著書「漢詩文引用より見た万葉集の研究」の中で、「遊於松浦河」と「遊仙窟」「洛神、高唐賦」との比較を表にし詳しく述べておられる。「竹取

翁の歌」(16・三七九^(註1))も柿村重松氏により、神仙思想の影響が指摘されている。又房前にあてた淡等謹状の「梧桐日本琴一面」の

構想(5・八一〇、八一二)、高橋虫麿の「水江浦島」の長歌(9・一七四〇・一七四一)についても、神仙性が述べられている。このような物語或は構想としての影響とまではいなくとも、単に個人的な思いを述べた作品にもそれはかなり現われている。例えば、神仙思想の若返りが詠まれているものとして「員外思故郷歌」二首

① わが盛りいたく降ちぬ、雲に飛ぶ薬食むともまた変若めやも
(5・八四七)

② 雲に飛ぶ薬食むよ。は都見は、いやしきわが身また変若ぬべし
(5・八四八)

を始めとして、

③ わが盛りまた変若めやもほとほとに、奈良の都を見ずかなり
なむ(3・三三二)

④ わが手まかむと念はむますらをは、変れ定め白髪生ひたり
(4・六二七)

⑤ 白髪生ふる事は思はず変若水は、かにもかくにも求めて行か
む(4・六二八)

⑥ 我妹子は常世の国に住みけらし、昔見しより変若ましにけり
(4・六五〇)

⑦ 古ゆ人の言ひくる老人の、変若といふ水ぞ名に負ふ滝の瀬
(6・一〇三四)

⑧ 古綱のまたをちかへり、青丹よし奈良の都をまたも見むかも
(6・一〇四六)

⑨ 天橋も長くもがも高山も高くもがも、月読の持てる変若水、

い取り来て君にまつりて変若えしむかも(13・三二四五)

という具合である。いずれも神仙思想が歌い込まれている。当時の歌人がこの神仙思想をどのように受けとめていたのか、又「遊仙窟」及びそれを模した「遊於松浦河」の神仙性・好色性という二点について考えてみたい。

一、神仙思想の受容態度

右にあげた個々の歌、及び構想的影響のものについてその受容態度を見るに、これには二つの型があるようである。

(1)、④から⑨までの歌は、素直に神仙思想に対するあこがれ或はそれに近いものが詠まれている。これは神仙思想の最も一般的な受け取り方と見て良い。

(2)、①②③の歌では、(1)の場合と多少趣きを異にしている。①②の歌では「食むとも(よは)」といい、③では「変若めやも」と反語の「や」を用いている。つまり仙薬を飲んでも若返りはしないというのである。旅人の心に老の嘆きが芽ばえた時、彼は神仙に出てくる不老不死の仙薬を思い浮かべてみる。しかし仙薬によって若返る事はできない。自分を若返らせるものは、都に帰る事だという境地に至るのである。そしてより一層左遷された事の悲しみが深くなるのであらう。

(3)、前述の個人的述懐に現われる外、これは物語的虚構の中においても見る事ができる。例えば「水江浦島」を取ってみるに、これは海岸に生育した異郷説話の一つがある文筆家に取りあげられて、神仙思想と結合し仙女に逢う物語として成立したものである。がこれの中で浦島は、約束に反して箱をひらく。それがために浦島は遂に

不死の人となり得なかった訳である。これも(2)と同じく、やはり一度神仙の境に身を置いて、すぐに現実の世界に帰ってしまうのである。

このように考えてみると、不老不死の神仙思想は現実の世界にあって、常世に生きたい、若返りたいという人間の夢であり、希望であり、なぐさめであり、理想であった訳である。しかしそれが一度現実の世界に戻ると、否定されざるを得ないものとして返ってくる。神仙思想は、やはり夢の、理想の世界のものでしかなかった訳だ。

このように万葉集における神仙思想は、一つには純粹に不老不死を願う素直に歌ったものがあるが、一方ではしばしば、現実に戻り否定されざるを得ないものとして表わされている。しかし、それは依然として、否定されつつもなお消える事なく、生活に密着したものである。そこには夢と知りつつもそれにあこがれ、頼らざるを得ない人間性というものが、実にありありと現われているような気がする。

結 論

以上、仏教思想を除いた漢土思想の主なもの——儒教・老荘・神仙思想についてほんの一面を見てきた。

儒教思想は憶良の作品に最も多く現われ、しかもそれには官人の立場としての教諭意識が多分に伺われる。例えば「婦徳」「敬老」「親子の情」等にしても皆教諭という形が取られている。

老荘思想は、当時異端視されていたにもかかわらず、盛装を脱いだ生活においてよく歌われている。旅人の「讃酒歌」には、老荘的

虚無感がよく伺え、三八五一番の歌は、純粹に老莊思想を詠み込んだものと見られる。老莊思想は、その表われ方も儒教と全く対照的に、自分の心情を被歴する場合が多い。

神仙思想は、物語的虚構及び個人的述懐として現われ、その傾向は老莊と同じく公的な場でなく、実生活の場合が多い。不老不死、羽化登仙の一面を持つ神仙思想は、現実からの逃避、あこがれ、夢であり、一旦現実に戻ると否定されざるを得ないものとして返ってくる。しかし、その現実の姿を知っていながら、なおあこがれざるを得ない人間性をよく現わしている。

ところで、これ等三つの思想を全体的に見て先ず気付く事は、各々の思想が殆んど一つの作品に単独の形で表われる事がないという事である。老莊と神仙のおおよそ系統を同じくし、思想的に似通っているものならいざ知らず、相反する老莊と儒教、共通する一面もあるが、一般に異質のものとされる仏教と老莊というものが、一つの歌に並存しているのである。

例えば、仏教と儒教を併用しているものに、「報凶問歌」「悲歎俗道仮合即難易去難留詩」「思子等歌」「老身重病経年辛苦及思児等歌七首」「哀世間難住歌」等があり、又老莊・神仙と儒教とを合わせたものに「令反感情歌」「竹取翁の歌」がある。殆んど全ての場合このように二つ以上の思想が合わせられている。これは一体何を意味するのであろうか。私はこれには三通りの解釈ができるように思う。

- 1、思想が徹底していなかった事。換言すれば思想が本当に自分のものになっていなかった事を意味する。
- 2、自己の教養の広さを示す意図が見られる事。

前項の理由と関連するが、作者に何らかの意味で、自分の教養の広さを示す意図があったのではなからうか。それはあくまで単なる教養の程度に止まり、その域を出たものでない事、つまり思想的に徹底していなかった事にもなる。内田氏の「万葉集において儒教或は老莊思想が稀薄である」^(注18)という見解も、恐らくこれと同じであらう。

- 3、思想を徹底させようとした事。

作者が述べようとする思想を徹底させるために、ことさら相反する思想或は類似する思想を引用したのではあるまいか。この手法は憶良によく見られる。彼が主として教論的な意味で、仏教或は老莊思想と並列的に儒教思想を説いているのは、その典型的な例であらう。これは又他の作家にも見られる手法である。

これ等三つの解釈の中で私は、第三の見解が最も妥当だと考える。確かに当時の人達がどこまで漢土思想を理解し、自分のものにしていたかは解らないし、その受容態度も作家によりさまざまであるが、これまで見てきた限りにおいては、思想性もまた少なからず認められるのである。それは又前にも述べたように憶良が儒教思想を持ち出すために、論理の展開の一段階として、仏教或は老莊思想を用いている事からでも、容易に理解できるであらう。